

## 知覚・感受って何だろう？

### －音楽科特有の「～すべき」を問い直す授業実践－

ふるかわ ゆうすけ  
古川 裕介（中学・高校）

#### 1. はじめに

本校音楽科では、令和6年度に引き続き、「知覚・感受って何だろう？」という学習指導要領の文言そのものに焦点をあてた問いを設定した。令和6年度の公開授業では、「鑑賞教材を効果的に活用した歌唱表現の創意工夫」という授業テーマを掲げ、鑑賞教材を表現の参考資料として提示することで、結果として知覚・感受を促すことにつながるのではないかと仮説を立て、歌唱分野の授業実践をおこなった。その結果、「感受」について、「感じたことを言語化」せずとも、「知覚を参照した表現」と捉えることもできるのではないかと可能性を示すものとなった。学習指導要領において音楽科学習の基盤として設定されている知覚・感受理論をどのように捉えたら教師の自律的な教育実践ができるのか、どうすれば子どもたちが音楽科の学習に主体的に取り組むことができるのか日々熟慮するなかであることに気がついた。それは、教師が無意識のうちに「～すべき」に囚われてしまっているのではないかとということである。筆者は毎年4月下旬に大阪教育大学教育協働学科音楽表現コース4回生教員免許取得希望者全員を対象とした教育実習オリエンテーションを担当している。今年度のオリエンテーション終了後、「大学で学んだ知覚・感受理論について思うところ、考えるところを自由に述べてください。」というアンケートを実施したところ、理論と現実の狭間で切に悩んでいる学生のリアルな声が聞こえてきた。その一部を紹介する。「知覚・感受は生徒たちが教材を理解するための1つのプロセスとして有効な手段だと思う。ただ、実際に模擬授業を行ってみるととても形式的になって本当に伝えたい指導内容が伝わっていないのではと感じる瞬間もあったので知覚・感受が必ずしも必要ではない時もあると思う。」「私の頭が固いのかもかもしれないけれど、知覚・感受をさせる方法が固まってしまっているように感じる。もっと様々な角度や視点、方法から知覚・感受させることはできないのか。」「必ず知覚してから感受するというように順序を決めてすぎてしまう

と生徒の感性を少し壊してしまう可能性があるなど思っている。どうすればよいかわからない。」これらの学生の記述から、「知覚・感受理論はいかなる場合もとり入れなければならない。」「知覚・感受は〇〇のような方法でさせなければならない。」といった、「～すべき」という目にはみえない強制力に無意識のうちに飲み込まれていく危険性すら感じる。教師の自律的な教育実践の可能性が、無意識の規範意識によってつぶれてしまっていないだろうか。知覚・感受理論はその最たる例ではないだろうか。音楽科教育の未来を描く上で、このような視点から考えてみることも必要ではないかという思いに至った。

本年度の全体テーマは、「学び合う生徒と教師～自走する生徒の育成をめざして～」である。生徒が自走した学びをするためには、まずは教師自身が自律的でなければならない。例えば、授業の冒頭に授業の目標を伝えることはもはや自明のことだが、そのようなことですら本当に適切なのか状況や文脈に応じて絶えず自律的に思考することが求められているといえる。「知覚・感受って何だろう？」という大きな問いから、音楽科教育の自律的な教育実践のあり方を広く考えるための公開授業をめざした。まさに生徒と教師と一緒に学び合いながら音楽科学習に取り組んでいくスタイルで授業を展開し、「音楽のよさや美しさを味わう」「合唱表現を創意工夫する」という音楽科教育においてあまりにも普遍的な目標をメタに捉えるとどのような授業実践が可能なのかに挑んだ。

#### 2. プログラム

令和7年（2025年）11月8日（土）実施

授業Ⅰ（10:00～10:50）【中学校1年C組】

音楽の「よさや美しさ」を相対的に捉える

授業Ⅱ（11:10～12:00）【高校Ⅰ年B・C組音楽選択】

合唱における音楽表現の探究 - 「指導内容の焦点化」はいかなる場合でも万能なのか？ -

場所：南館4階音楽室

授業者：古川 裕介（本校教諭）

研究協議（13:00～14:30）場所：南館4階演習室  
指導助言：長谷川 諒 氏  
（エリザベト音楽大学専任講師）  
司会：藤原 愛香（本校非常勤講師）

### 3. 授業Ⅰ（中学校）の記録

#### 音楽の「よさや美しさ」を相対的に捉える

##### （1）題材について

題材名：音楽のよさや美しさについて考える

①教材観：音楽教科書において、どの鑑賞教材の目標にも学習指導要領上の文言を引用して「音楽のよさや美しさを味わって聴きましょう。」と書かれているが、生徒にとってどのようにすればこの目標が達成されるのかなどが分かりにくいと考えられる。今回、音楽のよさや美しさについて検討していくにあたり、楽曲の構造上の特徴が異なる3つの楽曲を参考資料として準備した。1つだけ条件が同じなのは、男性が歌っているということ。声の出し方（音色）を知覚し、西洋音楽中心で生活している私たちにとって「このような声が美しい声だ」という無意識の価値観にメスを入れることのできる、対照的な3曲であると考えられる。音楽を形作っている要素とその変化の特徴を感じ取りやすい楽曲であることから、音それ自体の知覚にフォーカスした活動を通して、音楽を味わうことの意味について生徒たちと一緒に考えていきたい。

②生徒観：本学級は、音楽科学習に対して真摯に取り組み、表現活動において主体的に自己表現しようとする前向きな姿勢がみられる。クラスメイトと議論することにも抵抗はなく、周りに流されず自分の意見を主張することのできる心理的安全性の高いクラスであるといえる。鑑賞活動では、感じたことを言語化することには小学校時代から慣れている印象を受けるが、言語化するという行為そのもので満足して学びが完結してしまっている生徒や、知覚と感受を混同している生徒が多いことがワークシート等から読み取れる。

③指導観：音楽を聴いて「どう感じましたか？」という規範的な問いが、音そのものがどうなっているのかへの理解やその面白さに生徒自身が気づくことを妨げないようにしたい。美について「知る側面」と「感じる側面」があることを説明した上で、まずは声の出し方（＝声の音色）に焦点を当てて、知覚を促す。感受にあたるような発言が出た際には、「音を聴いて感じた印象を言語化してくださいね」「そう感じたのは音楽のどのような部分からですか」等と切り返し、2つの側面が混同しないように留意する。その後、音楽の構造上の特徴についてグループ

で検討する。その際教師はファシリテート役に徹し、「よさや美しさは固定化されたものではない」ということへの気づきを促すことにより、今後の鑑賞学習に対してより主体的に取り組むことのできる動機づけとなる授業となればと考えている。

##### （2）授業で扱う教材（楽曲）について

- ・「魔王」（フランツ・シューベルト作曲）
- ・「We Will Rock You」（ブライアン・メイ作曲）
- ・能《高砂》より

##### （3）題材の評価規準：

知識・技能	音楽の構造上の特徴について理解している。
思考・判断・表現	声の音色を柱として音楽を形作っている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取りながら、よさや美しさを味わって聴いている。
主体的に学習に取り組む態度	音楽のよさや美しさについて関心を持ち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

##### （4）研究授業当日の授業展開

既習教材であるヴィヴァルディ「春」を聴き、楽曲の構造上の特徴について確認した。そして美には、過去によいとされてきた事実を「知る側面」と「感じる側面」があることを確認し、「音楽のよさや美しさを味わう」ことについてともに考えていくことを伝えた。「知る側面」を切り口に、（2）で示した3つの楽曲を鑑賞し、1）声の出し方（音色）の特徴 2）楽曲の構造上の特徴 について、グループで検討し、全体共有をおこなった。グループ活動の方法として、教師側からグループごとに分析する1曲を指定し、IPADで何度も音楽を繰り返し聴きながら活動できるようにし、出た意見をホワイトボードに即座に記入する形ですすめた。全体共有では、自分が担当しなかった楽曲の構造上の特徴を、自分が担当した楽曲の特徴と比較しながら聴くことで学びが深まるような授業設計とした。最後に、「音楽のよさや美しさを味わうとは？」という本授業の本質的な問いについて、本日の学びをもとに自分の考えをワークシートに記入することを次時までの宿題とした。

（5）生徒の反応

授業後、生徒たちには学びの振り返りも兼ねて、「本時の授業についての感想（気づきや学び、感じたこと）を書いてください」という自由記述形式のアンケートを実施した。一見シンプルな構造である本授業に対して「面白かった」という記述が多くみられたことは嬉しく思うとともに、何より鑑賞活動に対して当事者意識を持って取り組んでいる様子が印象的であった。以下生徒の記述を抜粋して記載する。

- ・小学校の頃は音楽の授業での鑑賞はある曲に対する雰囲気を考えるだけだったが、今回の授業では声と音楽的構造の2つの観点を考えるとともに音楽のよさについても考えるということをし、とても面白かった。これからも鑑賞を進めていき曲の分析ができるようになりたいと思った。
- ・いつもは意識して考えない、音楽の声の出し方、使われている楽器について考えることができました。その時、私が思っていたよりもたくさん特徴が見つかって面白く感じました。
- ・最初は能からなにも思わなかったけど、能の楽器や入れ替わりをみてだんだん曲の流れのようなものがわかってきて、能を聞くのが面白くなりました。
- ・音楽のよさや美しさについて考えることを通して、他の歌の学習をするのも前よりもっと楽しくなったから、しっかりと音楽に浸る時間も大切であると思いました。
- ・声質や旋律などのそれぞれの曲の違いを言葉で表現するのが難しかった。（特に日本語には声質を表現する言葉が少ないのではないかな。）
- ・鑑賞した3曲は、伴奏があり、男性が歌うと言う点では共通していますが、それぞれ曲の雰囲気は全然違いました。頭の中でこんな感じだなんて思っている、言葉に表すことが難しかったです。でも、どのようなリズムの音楽か、どのような楽器が使われているのか、どのような部分で個性を出しているのか、どのように声を出している、どのような声なのか、など一つ一つピンポイントで考えてみると鑑賞しやすかったです。
- ・実際に様々な音楽を使って3曲全部を1つの班で考えるのではなく、1つの班ごとに1つの曲について考えるということで、1曲ごとの曲の内容や考察がしっかりと頭に入ってきてわかりやすかったです。

授業Ⅱ（高等学校）の記録

合唱における音楽表現の探究 -「指導内容の焦点化」はいかなる場合でも万能なのか？ -

（1）題材について

題材名：「合唱の魅力を探る ～ルネサンス期の合唱作品を通して～」

①教材観：ソプラノ・メゾソプラノ・アルト・テノール

ル・バスの5声部によるア・カペラ混声合唱組曲「アリアンナの嘆き」（全4曲）より1曲目「私を死なせてください」を取り上げる。クレタ島のミノス王の娘アリアンナはアテネの王子テゼオに一目惚れし、父や祖国を裏切りテゼオと逃亡するが、ナクソス島で寝ている間に置き去りにされ、嘆き悲しむといった劇的な内容となっている。旋律が持つエネルギーや詩の情感が音として素直に表出される合唱音楽を題材にすることにより、詩の内容と関わらせながら、音の響きそのものに注目するとともに様々な音楽的な要素とその変化に主体的に気づき、音楽表現をより深めていくことができるのではないかと考えた。また、題材後半では少人数声楽アンサンブルの形態での取り組みを実施する。大人数での合唱では調和を求めることを最優先事項として捉えることが多いが、声楽的なアプローチのもと各パートの歌手が自立して音を出していく体験を通して、ハーモニーを生み出すということについて、より深く考えることのできる教材であると考えた。

②本音楽選択クラスは、全体的にはおとなしく、ワークシートの記述などから「このように歌いたい」という生徒一人ひとりの思いや意図は感じられるものの、表出される歌唱表現としては消極的になってしまう部分がみられる。生徒自身のもつ音楽に対する潜在的なエネルギーを最大限に引き出し、歌唱表現につなげることのできる授業としたい。

③指導観：今回は、授業の目標を提示せず、いくつかの問いを設定し、その問いに対しその場で生み出される音楽そのものにアプローチする手法で授業をすすめる。なお通常とは異なる座席配置（図1）により、演奏者と聴衆両方の立場を生徒は経験することとなる。授業の中でめまぐるしく立場を変えることで、音楽をより多角的・多面的に捉えていくことにつながる。自由闊達な意見交換がおこなわれる授業の雰囲気作りを心がけ、教師は適切な発問と助言を軸に生徒の学びをファシリテートし、ハモることの喜びを自然と感じ取ることができるようオープンマインドな姿勢を大切にしたい。

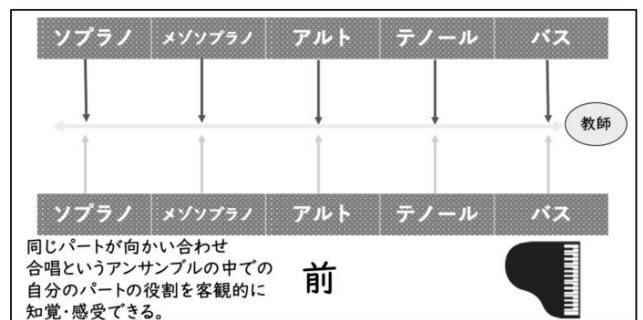


図1 本授業における座席配置

（2）教材について

Lasciate mi morire  
 (Prima parte di Lamento d' Arianna)  
 私を死なせてください  
 (「アリアンナの嘆き」より 1曲目)  
 クラウディオ・モンテヴェルディ (1567-1643) 作曲

（3）題材の評価規準

知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> <li>・曲想と音楽の構造や歌詞、文化的・歴史的背景との関わり及びその関わりによって生み出される表現上の効果について理解している。(知識)</li> <li>・創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身につけ、歌唱で表している。(技能)</li> </ul>
思考・判断・表現	音楽を形作っている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きを感受しながら、楽曲の構造上の特徴をもとにイメージをもって歌唱表現を創意工夫している。
主体的に学習に取り組む態度	テキストの内容や楽曲の構造上の特徴に関心を持ち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組もうとしている。

（4）題材の指導計画（全7時間）

「私を死なせてください」独唱版を生鑑賞し、受ける印象について話し合う	2時間
楽曲の文化的背景や「アリアンナの嘆き」全体のストーリーについて理解する <ul style="list-style-type: none"> <li>・全4曲の日本語訳を読む</li> <li>・グループで、アリアンナの人物像について考察する</li> </ul>	1時間
合唱における音楽表現の探究 ～音楽とテキストの両面から音楽表現の創意工夫を試みる～	1時間 本時
・少人数アンサンブル（各パート1人ずつ） 形態でのアンサンブル練習・発表	2時間
音楽選択生校内発表会における演奏	1時間

（5）研究授業当日の授業展開

授業は発声練習から始まり、「私を死なせてください」を通して歌った。その後、3つの問いを順に

生徒たちに投げかけた。①「アリアンナはなぜ死なせてくださいと嘆いているのか」②「本楽曲の構造上の特徴はどのようなところにあるのか」③「本楽曲を演奏するために、どのような歌唱表現の工夫ができるだろうか」

2群のパートごとでのグループ討議を中心に授業を展開し、出た意見をすぐに音に返して確認するプロセスを重視するとともに、本時の座席構造から、演奏者と聴衆両方の立場から考察することができるような学びの環境をつくった。最後は全員で合唱し、本時の学びの成果を演奏という形で表現した。

（6）生徒の反応

題材終了後に実施したアンケートより（対象：高校1年B・C組音楽選択生41人中 回答37人 回答率約90%）

「本楽曲の教材性はあると思いますか？」という問いに対し、約89%の生徒が肯定的な回答をした。（図2）

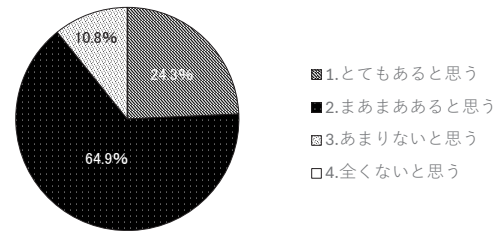


図2 本楽曲の教材性はあると思うか

その理由について、生徒は以下のように述べている。

- ・アリアンナの激しい感情の動きを自分で考えながら強弱や声色で表現するという力が身についたので教材性があった。
- ・この曲はメインとなるパートの交代が多いからメインの時の歌い方とハモリの時の歌い方を考える必要がある。また、伴奏がないから合わせようと思うと互いの声を聞くしかなくなる。歌い方や他パートの声を意識しやすいという点でこの曲は教材性が高いと思う。
- ・この曲はただ正しい音程で歌うのではなく音程に気持ちや感情を乗せて歌うことが求められるから。
- ・五声もあり、どうやったらハーモニーが生まれるのかを考えられるから。同じ歌詞だから、より強弱や感情の入れ方等の音楽表現を深く考えられた。
- ・曲が同じフレーズの繰り返しであり、そこをどう考えるかが重要になると考えているので、その違いを考えることにおいて教材性があると思うが、逆に同じ点において、歌う時の差異が少なく、測りづらい。

・イレギュラー感の強い教材で、これに対しての創意工夫を新しく考える必要があったため。  
・「嘆き」や「絶望」といった強い感情を、声の響きやフレーズの歌い回しでどう表すかを学ぶことができた。一方で、イタリア語の発音や装飾のニュアンスなど難しさもあるため、全員がすぐに表現しやすい曲とは言えないと思った。

「指導内容の焦点化」をしないからこそ、生徒自身が教材を通して多角的・多面的に学んでいることが読み取れる。「イレギュラー感が強い曲」「すぐに表現しやすい曲でない」との記述があるように、音楽をどのように捉えたらよいのかある種の迷いや疑問が生じるような教材をあえて使用することで、音楽を形作っているさまざまな要素に頻繁にアクセスしながら、音楽表現を生徒自身が主体的に探究することにつながったのではと考える。また、「本題材では授業の座席を変更して、授業を展開しました。通常の座席配置と比べ、合唱への学び方に変化がありましたか。」という問いに対して、約68%の生徒が肯定的な回答をした。（図3）その理由として、「従来の横並びと違い自分のパートの歌っている様子を観察できるため、相手の歌い方を参考にしやすい。また、音が分散されたことで互いの声が聞きやすくなった。」「向こう岸と一緒に歌っている人達が見えるので、一体感が生まれる。いつもは先生しか見えていなくて、聞こえるのも同じグループの人たちだけだが、違うパートの歌っている雰囲気もわかってよかった。」「歌声が聞こえやすだけでなく、表情や呼吸のタイミングも見えるので、全体的な調和を感じた。」等の記述があった。合唱活動において、本座席配置は、空間ギミックとして有効な手段であるといえるのではないかと考える。

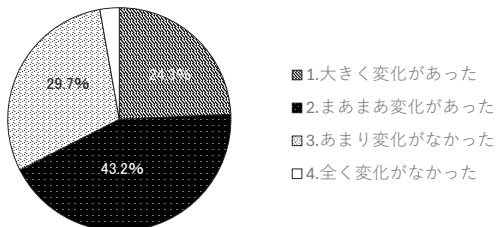


図3 座席配置によって合唱の学び方に変化はあったか

#### 4. 研究協議の記録

指導助言者 長谷川 諒氏からの授業後総括コメント  
授業Ⅰ（中学校）

「よさや美しさ」とはなにかという問いは、教師が考えることはあっても子どもが考える機会はまだ

りなかった。それをメタに捉えた鑑賞の授業という意味で面白い。その上でよさや美しさに対して形式主義的に迫ろうとする授業。印象のみならず楽曲の背景や歌詞の意味について全く迫らない授業に対して、参観者がどのように感じたのかが気になる。芸術の自律性（autonomy）を考慮すれば妥当であったと思う。最後の問いが「味わうってどういうこと？」というもおつでいい感じであった。

授業Ⅱ（高等学校）

指導内容の焦点化をあえてしないというコンセプト。中学の授業がラディカルに「内容（感じたこと）」を切り捨てていたのとは対照的に、詞の内容を踏まえた指導と形式に対する指導がどちらも含まれていた。なにより生徒が外国語の合唱に当事者意識をもって取り組んでいたのが印象的。結果的に生徒がのびのび歌っていた。特に、多声部を聴き合いながら合唱しようとする聴き合いはかなりできていたのではないだろうか。最終的に、他声部を聴き合いながら歌う必要があるとか、バスは他声部に対して音が長いのでブレスに気をつけたいとか、高い音の発声に気をつけたいとか、パートごとに気をつけたいポイントがバラけたのが「指導内容を焦点化しない」という狙い通りという感じであった。強弱記号がないのも生徒の工夫が安易なものに収束せず良い選曲であった。

長谷川（指導助言者）

古川先生のいう規範意識という言葉には二重の意味があったのではないかと考える。①私たち教員が慣例的な音楽の授業とはこうあるべきだということに縛られているのではないかと。②音楽表現とはどうあるべきかという規範意識。よさや美しさを味わうとはどのように考えるのか先生方の意見を聞いてみたい。

古川（授業者）

よさや美しさを味わうとは、音響を知覚することとその後の「何か」と考えている。

参観者A（中学校美術教員）

美術の世界では、「感情を理解する、イメージを捉える」というのが共通事項にある。このように捉えさせるべきという前提で授業が成り立っている側面があり、「モナリザ」等権威的なものを持ち出した時点で権威的な教材になってしまう懸念がある（素晴らしいと思わなければならないという前提が働いてしまう）点、音楽とも共通するところがあると感じ、興味深く本公開授業を拝見させていただいた。

### 長谷川（指導助言者）

・よさや美しさは美学の話である。よさを知ることとは、よいとされている事実と根拠を知ることである。ただしこれはよいと感じるということは全く別の話であり、デリケートな問題である。2つの「知る」と「感じる」がある。古川先生は、音を捉えるということとそこに何某かのイメージを持つことと定義しており、このことは伝統的な知覚・感受理論と並行している。長谷川のいうカントっぽい考えでは、知るというのは歴史の勉強としてよいとされてきたという事実を客観的に知るということで、感じるというのはカントのいう純粹美的判断のようなもの（一目惚れのような感覚）。

・どこに注目したら美しいと感じる可能性があるかということ、音楽なら音そのもの、美術なら色・線・形という話になる。これは芸術論の観点からいうと、形式主義的な考え方である。音楽が何を意味しているのかなど音そのもの以外の要素を全部排除してそれだけを純粹にみたときに、カントのいう美的判断がおこる可能性がある。音そのものに注目する契機をどうつくるのが音楽科が他教科と違ってやるべきことだと思う。古川先生は授業Ⅰ（中学）において、徹底してやっていたように感じたが、どうか。

### 古川（授業者）

感じたことを問うのではなく、音そのものに着目する本実践は、生徒にとって難しい活動であったと思うが、本時はこの軸で授業をすすめることを生徒たちに宣言し、粘り強く取り組むことで音そのものへの興味・関心がどんどん高まっていっているように感じた。

### 長谷川（指導助言者）

今日の授業後に話しかけてくれた生徒は、「うわ、今日の授業が面白かった！」と言っていた。何が面白かったんですかと問うと、「普段はミセスなど流行っている曲を聴いているが、日本の伝統音楽を今日みたいに分析して聴くと、のれないところはあるんだけど、音の形が捉えられるようになったのがとても面白かった。」と述べた。流行っているからとかではなく、形をよくみたら面白かったというのは、まさに形式主義っぽい聴き方をしているということになり、そのきっかけになっていたという点において、本授業のねらいが達成できていたのではないかと思った。

### 参観者A（中学校美術教員）

話を聴いていて、相対的美と絶対的美の話を想起した。化粧品の売り方において、かつては「このようなモデルさんになれますよ」という誰かが決めた一般美を持ち出して売るのが主体であったのが、今

は「あなたの本来もっている顔を生かしますよ」という可能性を引き出す美（＝見出す美）をめざしている傾向にある。音楽においても、たとえ権威的な教材を使用したとしても、どう自分が受け取って、ここがよいというところを見出すのかに授業の力点をおいてやっていく必要があるように感じた。普遍的な美しさとそれぞれが感じる見出せる美があることを信じて授業をおこなっていきたいと、お話を聴いて思った。

### 質問1

#### 参観者B（高校音楽教員）

知覚に焦点をあてた授業だと最初は思っていたが、生徒の感受を支援している授業のように感じた。生徒の発表の中にも溢れ出てしまう感受的なワードがあった。知覚を突き詰めることで、感受のチャンネルが増えているのではないか。音そのものに着目する生徒自身の引き出しが増えていっているように感じた。感受したものを記号にする訳ではなく、非言語的な何かが生まれているような気がした。評価について、どのようにつなげていかれるのか。

### 古川（授業者）

記録に残す評価としては設定していない。今後鑑賞授業を実施する上での、導入としての位置付けと考えている。

### 質問2

#### 参観者C（中学校音楽教員）

まさに自走する学習であり、生徒たちが短時間で多くのことに気づいていた。ただし公立学校でこのような授業ができるのか。まねしてみたいという気持ちはあるが仮に自分がこのような授業をした際に、子どもたちに何を残せるかが不安である。

### 古川（授業者）

結果はあまり重視していない。このような視点で授業を構想する過程にこそ意味があると考えている。生徒の学びの状況に応じて、授業形態や声かけも柔軟に変えていく必要を感じている。実際、本校であってもクラスによって反応は大きく異なり、学びの支援の方策については実情に応じて検討していくことが大切である。

### 長谷川（指導助言者）

この学校の生徒は自律的な学習に慣れている印象である。多くを生徒に委ねる自律的な学習ができるかどうかは、自律的な学習に慣れているかどうかのポイントである。慣れていないうちは不適応を起こすものである。それでも一定自律的な学習時間をつ

くらないと、結局自律的な学習はできない。どこかで勇気を持って試してみる必要がある。最後に先生がうまくまとめないと生徒に何も残らないのではというご懸念もよく分かる。一方で、わからなさに直面したときに対応する力も身につけないといけないため、たまには先生がまとめないオープンな授業があってもよいのでは。

### 質問 3

長谷川（指導助言者）

授業Ⅱ（高校）では、男子が積極的に歌っていた。何か工夫はあるのか。

古川（授業者）

居心地が良い雰囲気をつくることができるようにしている。権力構造をできるだけ排除し、心理的安全性の高い環境で合唱できるように心がけている。本時の具体的な工夫としては、合唱練習場面でバスパートから歌い、発言してもらいなどし、当事者意識をもたせるとともに、各パートの役割を全員が理解することで、男子の主体性を集団の中で高めることにつながっているのではないかと考える。

### 質問 4

参観者 D（小学校音楽教員）

芸術科ならではの授業であると感じた。授業Ⅰ（中学）を見て、知覚面が育ってきている。授業Ⅱ（高校）では、綺麗な声で歌える生徒が多い印象である。話し合いの中で工夫しようとする姿勢がみられた。1点気になったのは、今回の授業では、板書等はされておらず、残るものがないというようにもみえた。学びという視点から考えたときに、「学びの自覚」という観点からはどのように考えられるのか。

古川（授業者）

単元終了時点において、振り返りを記述して提出させている。自分自身と教師側のフィードバックになる。本授業のねらいを達成するために、絶えず他者と対話し、学びを深めていくというスタイルを今回はとった。「学びの自覚」も必要な場面とそうでない場面があると考えている。授業展開に応じて、柔軟に考えていく必要があると思っている。

長谷川（指導助言者）

音楽における学びの自覚について、どこまでラディカルにやるのかは難しい話である。芸術は、人間の無意識が作用している側面がある。必ずしも言語化できないが、価値ある経験になっていることがある。バランスが大事である。現行の学習指導要領では、言語活動の充実が求められており、意識で考

えることのできる合理的な根拠が必要だという雰囲気になっている。それが、果たして音楽とマッチしているのかということは考えさせられる。どちらかに偏りすぎてはいけない。合理的に考える側面も持ちながら、そうでない側面も持ち合わせて授業を構想する必要がある。学びを意識化させないことのメリットもあるのでは。

### 5. 今後の展望

昨年度同様、研究協議では参観者から多くの感想や意見をいただき、充実した学びの場となった。音楽科特有の「～すべき」を問い直す一連の実践の中で、今ある音楽科教育の理論をさらに勉強したいという気持ちが強くなった。知覚・感受理論について、実践者の立場から捉え直しをすすめてきたが、本理論が生まれた背景を理解することで、学習指導要領の文言についてより批判的に検討していくことができるのではないかと考える。そしてこの検討の過程にこそ、よりよい音楽科教育を構想する上でのヒントが隠されているのではないかと考える。引き続き、本研究課題に基づく授業実践を続けていく予定である。

### 参考文献

- 長谷川 諒(2024)『音楽科教育はなぜ存在しなければならないのか —「良い音楽科教育」を構想するための目的論』明治図書
- 古川 裕介(2025)「知覚・感受って何だろう? —鑑賞教材を効果的に活用した歌唱表現の創意工夫—」大阪教育大学附属天王寺中・高 研究集録 第 67 集(令和六年度), pp. 119-125